

## 天正狂言本の米沢伝来外証

田口和夫

○八年十月の法政大学能楽セミナー「時代を拓いた能や狂言の本たち」で、天正狂言本（以下天正本、法政大学能楽研究所蔵）について話し、狂言研究史上の位置づけについてあらためて考えた。天正本の意義は一言で言えば、「狂言における中世の発見」であった。

天正本が初めて学界に紹介されたのは、昭和十五年、「国語と国文学」十一月号、笹野堅氏「能狂言の成型」においてである。その反響はほとんど無かった。越えて昭和三十一年一月、朝日新聞社の日本古典全書「狂言集」下に、表章氏による天正本の翻刻・校注・解説が附載され、その後の狂言研究にコペルニクスの的転回をもたらす事になる。

天正本の伝来については、発見者の笹野氏は明らかにせず、表氏が「解説」に言う「東北地方から出たもの」、「伊達家・上杉家など、東北のいづこかの藩に仕へた地方狂言師の記録した本であるといふ想定」が、まず知られる。次いで国語学方面から蜂谷清人氏ら、専門研究者として堀口康生・橋本朝生氏らによ

つて、東北方言と目される語彙が見いだされ、私も川瀬一馬博士の談話によつて、米沢伝来の可能性について述べたことがある。

今回、天正本と米沢に伝来した鷺流の最古本延宝忠政本を比較したところ、面白い外証が得られたので報告しておきたい。掲出した写真は右が天正本、左が延宝忠政本である。

まず、表紙の次の一丁裏の書き入れ部分を見る。両方とも一丁裏が目録になるので、本来ここは見返であつたらしい。忠政本は「拾遺和歌集」源重之の「花の色にそめし袂のおしけれハ衣かへうきけふにもある□」が散らし書きにされ、右下に所蔵者「善行寺片町寺嶋氏」とある。天正本は強く摺り消した痕があり、右下方にはそのために空いた穴が二カ所ある。今回赤外線でも確認してみたところ、文字としては読み取れないが、比較的大字が散らし書きされていると判断できた。忠政本のように、和歌が記されていることが想定されるのである。これを摺り消したのは所蔵者を隠すためであつたか。



次に対比するのは末丁裏の部分である。天正本は本文の後に丁寧に写された「正久（花押）」と楷書・草体二つの「天正六年七月吉日」と落書きとみられる花押三が書かれる。表氏は草体の年記以下を落書きとされる。忠政本は楷書の「文政九年霜月吉日」ともう一つ同じ日付と花押、練習したと思われる十四五の花押が書かれる。忠政本の文政九年（一八二六）は本文奥書の延宝六年（一六七八）より遙かに下るものであり、後人の所蔵落書きであることは確かである。年記の下に書かれた花押に注目したい。これが天正本の正久の花押と酷似していることに今回気付いたのである。この花押だけが他の数多い落書き花押と形が異なっていることに気付いた。正久花押を真似してここに書いたとも言えそうである。他に、年記が二つ書かれること、花押の落書きがあることも天正本との共通点としてあげられよう。異なる狂言台本の冒頭と末尾に、このように類似した後人の書入れがあるということとは、この二書が同様の保管状況にあったからと言えないだろうか。忠政本は延宝六年に忠政（姓未詳、米沢藩の役者で指導的位置にあった小田切長左衛門か）が著した後、米沢藩延享二年（一七四五）分限帳芸者（能楽の役者）組の項に見える寺嶋氏のもとに伝承され、文政九年に当主寺嶋清右衛門が書き入れをした。この時、寺嶋氏は芸者組を離れており、この書の価値を知らぬ寺嶋家の

後人が落書きを加えたということになる。類似の落書きを同人がしたと考えると、天正狂言本は、正久が著したものを米沢藩芸者組の誰かが書写し、それが寺嶋家に伝来した可能性がある。川瀬博士が私に忠政本を恵与された次第を記した後記に「本書は東京本郷なる永森直次郎書店にて求む、昭和十一年六月頃と覚ゆ。直次郎老人は米沢より数々の珍書を買ひ出し来たる」と記される。笹野氏が天正狂言本を紹介されたのは昭和十五年のことである。同時期に永森書店で購入されたと言つてよいであろう。

以上、忠政本との外証比較によつて、天正本の米沢伝来の可能性について述べた。忠政本の系統にある、米沢藩芸者組有江氏の寛政有江本（観世文庫蔵）（柿山伏）に天正本（かきくい山ぶし）「うぶつて」と同じ東北方言「ウフハレル（負われる）」があるという、既報告の内証も併せて、米沢という土地は天正本にとつて重要であつたと言えよう。米沢は、天正六年には伊達氏が領有しており、天正十九年（一五九二）に蒲生領、慶長三年（一五九八）上杉領となり、直江兼続が入城、慶長六年上杉景勝入城以降上杉氏の居城となるので、天正本の原本は伊達氏領有の時代に成立したことになる。そのまま天正本原本は米沢に伝来し、上杉氏の時代に書写されたという事になるか。

（文教大学名誉教授）

